

第II部

東南アジアをめぐる グローバル・イシューと地域研究

東南アジアは古より世界のさまざまな文明を吸収することで小世界を築いてきた。文明の多極化が進むいま、世界の縮図である東南アジアからどのような新しい価値が発信されようとしているのか。

グローバル・ヒストリーと東南アジア史

太田 淳

はじめに

本稿に与えられた課題は、グローバル・ヒストリーの研究が、どのように東南アジア史研究と関連づけられるかを検討することである。まず第I節では、グローバル・ヒストリーの多様なアプローチのうち、「比較」、「平行」、「接続」を取り上げ、先行研究の議論と東南アジア史研究との関連を検討する。「比較」のアプローチに関しては、ウォーラーSTEINの世界システム論に対する批判を検討する。「平行」はまだそれほど普及したアプローチではないが、ヴィクター・リーバーマンの近年の研究を取り上げ、その有効性と問題点を検討する。「接続」のアプローチでは、

今までの研究がウエスタン・インパクトを重視（または過大視）してきた傾向を指摘する。

第II、III、IV節ではウエスタン・インパクトの相対化を目指す近年の研究を検討する。第II節では日本やアジアの経済史における近年の研究を検討し、東南アジア史研究にも取り込み得る有効な視点を探る。第III節では主にリードの提唱する「最後の抵抗」というコンセプトを検討し、その問題点を探る。第IV節では、筆者自身が別稿（太田二〇一三b）で検討した、一九世紀半ばにおける蘭領東インドの貿易を取り上げ、ウエスタン・インパクトの多様性について議論する。

これらの検討を通じて本稿では、東南アジアがどのようにグローバル・ヒストリーに位置づけられるべきか、そして東南アジア史研究がどのようにグローバル・ヒストリー

の研究に貢献できるかを考察したい。なお、本稿では主に経済的側面に着目するが、他にも環境、疫病、技術、生活文化など、グローバルに検討すべき重要な側面があることは言うまでもない。

I グローバル・ヒストリーの中の 東南アジア

1 世界システム論の批判

イマニユエル・ウォーラーステインの『近代世界システム』(ウォーラーステイン 一九八一―一九九七)〔一九七四―一九八九〕は、近年の世界経済史研究において最もインパクトのあつた著作と言つて過言ではない。世界システム論は、ごく簡略に述べるならば、一五世紀末からヨーロッパを中心に発達した世界経済が、時代とともに地球上に拡大し、世界各地を辺境、半辺境として従属化させていくという考えである。ウォーラーステインはこのように、世界システムはその開始以来ヨーロッパをただ一つの中心とし、そこから世界に拡大し続けていると理解している。この点をウォーラーステインの「ヨーロッパ中心史観」と指摘することは容易であろう。

実際ウォーラーステインの世界システム論に対しては、多くの批判がそのヨーロッパ中心主義に対して向けられた。『ヨーロッパ覇権以前 もうひとつの世界システム』の著者ジャネット・L・アプエルゴドは、ヨーロッパが台頭する以前の「一三―一四世紀には、世界の経済的・文化的中心は中東、中央アジア、インド洋沿岸、中国などの地域にあつたと論じた(アプエルゴド二〇〇一)〔一九八九〕。同様にアジアとヨーロッパを比較した研究においては、アンドレ・グンダー・フランクとケネス・ポメラントウが出色である。フランクはウォーラーステインだけでなくマルクスやウエーバーなど多くの有力な著作にみられるヨーロッパ中心史観を批判し、アジアの経済的優位性を実証的に証明しようとした。彼はその代表作『リオリエン』の中で、貨幣システム、人口、生産、消費などを分析して、一八世紀までアジアはヨーロッパに勝る経済発展を遂げていたことを論じた。ヨーロッパはアジア経済の収縮期にアメリカ大陸からもたらされた貴金属の供給によつて経済活動を拡大させたにすぎず、その結果、世界経済における主導的地位がアジアからヨーロッパに移行するのは、一七五〇―一八五〇年頃であるとされた(フランク二〇〇〇)〔一九九八〕。ポメラントウは、一八世紀後半までの世界経済における中国の優位性を主張する。彼によると、一八世紀後半までは平均寿命、一人あたり綿布使用量などにお

いて西ヨーロッパと東アジア（中国の揚子江流域と日本の畿内・関東）における発達の程度は同程度であった。一八世紀に「大分岐 great divergence」が起きて西ヨーロッパと中国の経済力に大きな隔たりが生じるのは、前者が新大陸の第一次産品と近隣の石炭を利用することができたからであった（Pomeranz 2000）。このように、これらの研究はアジア各地の経済を詳細に検討してその発展程度を証明し、ウォーラー・ステインのヨーロッパ中心史観を批判した。

これらの研究は、一定時期のアジアの経済をヨーロッパと比較して、両者の同等の発展や前者の相対的優位を示そうとしていることに特徴がある。この方法は、ウォーラー・ステインのヨーロッパ中心史観を批判し、グローバル経済史に関する人々の認識を転換させる上では非常に有効であった。しかし、今後もさらにある時代の世界経済の中心を探し求めることが、世界の経済構造の理解を深めるとは限らないであろう。ヨーロッパに対抗し得る経済的中心を歴史上に求めることに関心が集中すると、歴史上一度もそのような地位に位置したことのない東南アジアのような地域は、正当な関心を受けることはない。世界経済をヘゲモニックなシステムとしてのみ捉え、諸地域を対抗的に比較することよりも、世界の諸地域がさまざまな補完的關係を結び世界経済を構造化していたことを検討する方が、歴史

の理解のためにははるかに生産的である。そのような作業はまた、世界の多くの地域の歴史発表をグローバルに位置づけることを可能にするであろう。

東南アジア史研究においては、その歴史を世界の経済的中心との対抗的な比較において捉えようとする視点は決して主流ではないが、一般的な書物においては皆無ではない。たとえば一部の著作は、一六〇一七世紀に東南アジアの港市を訪れたヨーロッパの商人が、その市場や取引の規模の大きさに驚嘆したことを強調する。二〇〇二年にオランダ各地の博物館等で開催されたオランダ東インド会社四〇〇周年を記念する展覧会では、一七世紀のインドネシア諸島が豊かな物質文化を誇り、香料などの貿易を通じオランダの生活文化を豊かにしたことが指摘された（太田二〇〇三）。東南アジアのある地点における市場取引の規模がヨーロッパのある地点と正確に比較されることには経済史研究上の意義があるが、単にヨーロッパと対抗的に比較するためにアジアの優位要素を恣意的に選択して強調することは、ヨーロッパ中心史観の裏返った表現にすぎない。展覧会の例では、インドネシアの物質的豊かさの強調は、オランダ東インド会社の活動を過度に礼賛する展示の正当化としても作用していた。「比較 comparison」がグローバル・ヒストリー研究の有効な方法の一つであることは間違いないが、比較の手法を用いて東南アジア史をグローバ

ル・ヒストリーに位置づける場合には、比較の指標が恣意的に選択されて対抗的な比較が行われていないか、注意を払う必要がある。

2 リーバーマンの『ストレンジ・パラレルズ』

ビルマ史を専門とするヴィクター・リーバーマンの『ストレンジ・パラレルズ (Strange Parallels 奇妙な平行)』は、他の多くの論考と異なり、東南アジアをグローバル・ヒストリーにおける重要な考察対象としている点で注目値する。リーバーマンによれば、ユーラシアは、ヨーロッパ諸国または中央アジア遊牧民による侵攻から「保護された地域 (protected zone)」とそれに「さらされた地域 (exposed zone)」に大きく二分できる。それぞれの地域に存在した国家には、発展のリズムにおいて強い平行性が確認できる。彼によれば、中世バガンやアンコールは、他国によって侵略されることがなく、文化的発展の要因を他国との商業的、外交的、軍事的接触から得たという点で、キエフや日本との発展と平行している。これに対し、近世島嶼部東南アジアは、ヨーロッパ諸国または中央アジア遊牧民から侵攻を受けたという点で、中国、インド、中東との平行性が確認できる。さらに近世大陸部東南アジアの国家およびオランダ東インド会社は、私商人の商業的拡大と国

家間の戦争に苦しめられたことにおいて、フランスとの間に平行性がみられるとされる (Lieberman 2009)。

リーバーマンの議論で注意しなければならないのは、彼がある時代の発展や衰退を議論する時、その対象は常に国家であることである。そのためリーバーマンは一八世紀の島嶼部東南アジアにおいて、華人商人、イギリスの私商人、さらにプギス人など多くの集団が参入して貿易が活発化したことを論じながら、この状況を国家の危機と捉えている。こうしたなかでいくつかの国家やオランダ東インド会社（半国家と捉えられている）が衰退した現象を彼は東南アジアにおける「一八世紀の崩壊 18th-century collapse」と呼び、それが一九世紀に入ってから政治的秩序の劇的な回復の前提条件となったと論じた (Lieberman 2009: 83-874)。つまり、民間商人による貿易の活発化は、リーバーマンの議論においては発展的要素と捉えられない。しかし国家による住民の把握がもともと弱い東南アジアでは、国家の支配が弱くても（あるいは弱いからこそ）地域社会や一般住民、商人などが自由な行動を取り発展を示すことも多かったのではないだろうか。もう一つの問題は、「一八世紀の崩壊」という議論は、東南アジア国家のなかでもその一部にしかあてはまらないことである。一八世紀の東南アジア島嶼部では、民間商人の活動活発化が国家の発展を刺激したスローリーやリアウ（ジョ

ホール王国)のケースが存在したが、リーバーマンはこれらを議論していない。

しかしながら、リーバーマンが試みた「平行 parallel」というアプローチは、今後グローバル・ヒストリーの研究を進める上で大きな可能性を持つように思われる。このアプローチは、遊牧民の侵入といったある要素が各地に及ぼした影響を比較考察する。通常の「比較」のアプローチと異なる点は、この場合でいうならば遊牧民の侵入という共通する要素を指標として比較が行われることである。たとえば疫病などはグローバル・ヒストリーの手法が有効とされるテーマであるが、局地的な発生源から多くの地域に伝わることを考えれば、離れた地域間で「平行」する（もしくは「平行」しない）歴史展開を検討することも可能であろう。農業技術においても、よく似た環境の地域を比較してその平行性の有無を検討することも可能かもしれない。この「平行」のアプローチは、東南アジア史を他の地域と比較する際の一つの有効な方法となる可能性を持つと言える。

3 「接続」のアプローチ

グローバル・ヒストリーの重要なアプローチとして、他に「接続 connection」があげられる。そもそもグローバル

ル化という概念がヒト、モノ、情報、環境的諸要素などの動きが世界のさまざまな地域を接続していったことを指している。グローバル・ヒストリー研究における「接続」の側面への着目は、言わば当然と言える。グローバル化が歴史上いつ始まったのかというのは、その中でも重要なテーマであるが、この問いにはさまざまな視点から回答が試みられている。人類の地球上の移動を考えるならば、それは大半の地域で約一〇〇万年前から約一万年前ということになり(ダイヤモンド二〇一二・上巻、六三―八九)、人類やその他の生物が生息できる環境が用意されたことに着目するならば、それをはるかに遡る地質学的時代になる。経済的側面を検討する研究者の間では、一六世紀末に中南米の銀が中国まで届けられるシステムが構築された時に経済のグローバル化が始まったとする、デニス・フリン等の主張する説が近年は有力である(Flynn et al. 2003)。もちろん移民や国際貿易に伴うグローバルな経済のつながりはそれ以前から存在しているが、この時期にそれが非常に大規模化、加速化、システム化したことは指摘できよう。デニス等が検討した銀の流通に加え、非常に多様なモノの動きが検討されたのが、「接続」のアプローチの特徴である。主なものだけでも、茶、コーヒー、砂糖、香辛料、チョコレート、タバコ、アヘン、綿布などがあげられる(角山一九八〇・臼井一九九二・ミンツ一九八八・川北一

九六六・ドルビー二〇〇四・武田二〇一〇・グッドマン一九九六：Trocki 1999；Riello and Parthasarathi 2011）。こうした研究は、単に貿易にとどまらず、生産、流通、消費といった面を検討することによって、モノの世界的な流通が、生産地や消費地における社会変容や新たな文化の創造とその広がりなども強く関わっていたことを明らかにした。これまでのグローバル・ヒストリー研究が経済的側面の検討に偏りすぎているという批判が一部にあるが、少なくともここにあげたような研究は、社会的・文化的側面の探求においてもグローバルなアプローチが有効であることを示したと言えよう。

もっとも、こうした「モノのグローバル・ヒストリー」には、一つの興味深い特徴を指摘できる。これらの著作は、植民地期以前の時代については、そのグローバルなモノの動きやハイブリッドな文化の創成を積極的に称揚する傾向がある。一方植民地体制下の生産は、伝統的生活文化の喪失を伴う抑圧的なものとして描かれることが多い。そもそもこれらの研究に、植民地期およびそれ以降の時代への言及は決して多くない。それはまるで、近世までのグローバルで対等な世界各地の関係が、近代における西洋の台頭とともに、非対等で抑圧的なものに変容することを示唆しているかのようである。この傾向は実際のところ、「モノのグローバル・ヒストリー」に限らず本稿の取り上

げた多くのグローバル・ヒストリー研究が一八世紀末から一九世紀半ばまでで検討を終えていることと無関係ではない。グローバル・ヒストリー研究の、とくに経済的側面を検討する著作の多くが植民地期以前を扱うことによってグローバル化の正の側面を強調する一方、植民地期以降を取り上げないことによって、台頭する西洋がその他の地域にもたらした衝撃——ウエスタン・インパクト——を不可避免かつ抵抗し得ないほど強力で破壊的であったと暗示してしまっているかのようである。

一方、そうした著作と異なり、植民地化が進展する時期におけるグローバリゼーションの社会・文化的側面を主題としたのが、クリストファー・ベリーの『近代世界の誕生、一七八四—一九一四』である。この中でベリーは、衣服、時間的規律、食事といった生活習慣や身体行為 *body practice* が世界中の多くの地域で同質化したこと、また同時に同質化への抵抗の結果として伝統の復活・創造や新たな文化の創出が世界中で見られたことを論じた (Berry 2004)。ベリーが論じたような生活習慣や身体行為の同質化はまさに近代の特徴の一つであり、近代世界の誕生をそのような面から論じるベリーの視点は斬新である。同時にそれは、政治・経済的に強力であった時代・地域に関心が集中し、植民地化された地域など自立性が弱まった社会を対象から外す傾向のあったグローバル・ヒス

トリー研究の層の薄い部分を補う重要な研究ともなった。一方、ここで取り上げられるのは、同質化を迫られるほどウエスタン・インパクトの大きかった社会であり、当該社会はその受容か何らかの抵抗を余儀なくされたように見える。しかしそのように同質化を強く迫るほど「西洋」が強力なプレゼンスを持った非ヨーロッパ社会は、当時の世界においてどれほど一般的であったのだろうかという疑問は残る。「西洋」のプレゼンスが強い社会には多くの記録と資料が残るが、そうでない社会にはあまり残らない。そのように情報が不均衡に存在することを念頭に置かねば、我々のウエスタン・インパクトの理解は誇張されたものになりかねない。そして「西洋」のプレゼンスが弱ければ、ヨーロッパ起源の要素を選択する現地社会の自主性も、それだけ高くなる可能性を検討する必要があるであろう。

II ウエスタン・インパクト論を越えて

1 輸入代替工業化論

このようにウエスタン・インパクトが過度に強調されることを問題視し、その相対化を試みた例として、浜下武志や川勝平太などが論じた輸入代替工業化論をあげることが

できよう。彼らによれば、日本は幕末・明治初期の開国によってヨーロッパ諸国の圧力によって工業化を迫られたのではなく、江戸時代の「鎖国」と呼ばれる管理貿易体制の中で、綿布、絹織物、砂糖といった主要な工業品の国産化（輸入代替化）をすでに済ませていた。このことが日本の経済を自立化させ、開国以後の急速な近代化と国際競争に對抗できる基盤を築いていたと指摘される（浜下・川勝一九九二）。

東南アジアでは、このような近世における輸入代替工業化論はまだ活発ではない。しかし、たとえば東南アジア各地の染織品生産は、輸入代替工業化の視点から論じられないだろうか。ジャワのパティック生産は、一七世紀末にインドからの輸入が停滞した時期に大きく発展したことが知られている。それまでインドネシア諸島では主に現地産の布が地域消費用に用いられ、宮廷や儀礼で用いられる高級品にはインドからの輸入布が使われていた。ところが一七世紀末にインド・コロマンデル地方の内乱などによって輸入が滞ると、ジャワでパティック（主として蠟防染技術を用いた模様染め）の技術が発達し、コロマンデル産の更紗（媒染などさまざまな技術を用いた模様染め）に一部代わる高級布としてインドネシア諸島各地に輸出されるようになった（Andaya 1989）。パティックは、コロマンデル更紗のみならず、別の高級輸入布であるグジャラート地方の

パトラ（経緯^{たせま}の技術を用いた模様織り）などの意匠も模倣しながら、ジャワ独自の発展を示した（吉本 一九九六）。一八四〇年頃からはイギリス綿布がインドネシア諸島にも大量に輸入されるようになるが、パティック生産はそれによって衰微するどころか、今日にいたるまで島嶼部における需要を部分的に支えている。このような発展を輸入代替工業化論で捉えることは、ジャワの工業化におけるウエスタン・インパクトを再検討することになるだろう。

2 アジア間貿易

浜下武志と川勝平太は、先の輸入代替工業化論を「アジア域内交易」という概念とセットとして検討した。つまり、一六〇一八世紀に東アジアや東南アジアでは活発な域内貿易が行われており、その競争に対抗するために近世日本の輸入代替工業化が進んだと彼らは論じた（浜下・川勝一九九一）。彼らの著作に近世東南アジアを論じた論考は含まれていないが、一七世紀のベトナムにおける生糸と磁器の生産・輸出もまた、日本と同様に貿易競争の中から生じたと考えられよう（Hoang 2007；太田二〇一三a）。

杉原薫は、「アジア間貿易」という、浜下や川勝が論じた「アジア域内交易」とは微妙に異なる力点を持つ概念を提唱している。浜下や川勝が主にヨーロッパ諸国によるア

ジアプレゼンスが強まる以前の一六〇一八世紀の近世アジア貿易を論じているのに対し、杉原は一九世紀後半から二〇世紀初めの、近代国際貿易構造が確立した後のアジア諸地域間の貿易を議論する。杉原によれば、当該時期における日本、中国、蘭領東インド、海峡植民地、香港、インドといったアジア諸地域間の貿易は、アジア・ヨーロッパ間の貿易を上回る成長率で増加した。西洋諸国によるアジアとの貿易は、アジア諸地域間の貿易も刺激し成長させたのである（杉原一九九六）。

もともと杉原のこの議論は蘭領東インドや海峡植民地など東南アジアを対象に含むとはいえず、東南アジア自体の貿易が十分に検討されたとは言いがたい。東南アジア諸地域における貿易は、それらと欧米、インド、中国など東南アジア外の地域との結びつきにおいて検討され、東南アジア諸地域間の貿易は十分考察されなかった。

このように杉原の議論では十分取り上げられなかった東南アジア域内の貿易を検討しているのが、小林篤史である。小林は、一八二〇年代から一八五〇年代にかけてのシンガポールの貿易は、欧米やアジア他地域を相手とするものよりも、東南アジア域内各地を貿易相手とする部分の方がはるかに大きかったことを論じた（小林二〇一二）。もちろんシンガポールと欧米との貿易は当該期間に大きく伸びているのだが、シンガポールと東南アジア諸地域との間

の貿易はそれ以上に大きく発展した。しかもそうした東南アジア域内貿易の担い手は主に華人やブギス人であったということは、一九世紀東南アジア域内貿易の伸張は、ウエスタン・インパクトの直接的な結果というよりも、ウエスタン・インパクトを契機として域内の自律的發展が進んだことを意味すると言えよう。

Ⅲ 東南アジアにおける近世から近代へ

1 「最後の抵抗」

前節では日本やアジアの経済史を専門とする研究者による、アジア貿易におけるウエスタン・インパクトの再考を検討した。本節ではウエスタン・インパクトの問題を東南アジア研究者がどのように議論し、またそれがどのような問題を抱えているかを検討することにした。

近世東南アジアの研究においては、その最も繁栄した時期は「商業の時代」と呼ばれる一四五〇〜一六八〇年頃であったという理解が、最近まで有力であった。この分野で現在世界で最も影響力を持つと言えるアンソニー・リードは、一九八八〜九三年に出版した著作『商業の時代の東南アジア、一四五〇—一六八〇』において、その時代の東南

アジアには、中国のジャンク船や西アジア・インドから来るイスラム商人、さらにヨーロッパの東インド会社などの活動に刺激され、長距離貿易によって繁栄する港市国家が数多く台頭したことを論じた。しかし一七世紀末になると、そうした有力国家がオランダ東インド会社によって制圧されたのを機に、商業の時代が終焉を迎えたと述べた(Reid 1988:1993)。

ところがリードがこの著書をそのように終えたために、東南アジアはそれ以降長期にわたる衰退期に入ったとの印象を与えた。このことをリード自身が認め、その修正を図って彼が新たに提起したのが、一七五〇〜一九〇〇年頃における東南アジアの「最後の抵抗 Last stand」という概念である。リードによれば、この時代のうち、まず一七五〇〜一七八〇年という時期は一種の危機の時代で、そこから新しい近代的秩序が生まれる分水嶺であった。彼によればとくに商業化、行政の集権化、知の革新、そして文化の大衆化といった面の發展が「最後の抵抗」の時期に顕著となり、その後の時代にさらに展開していった(Reid 1997a: 10-21; 1997b: 61-62, 70-71)。

つまり「最後の抵抗」が意味するものは、東南アジアの繁栄が、ヨーロッパ諸国による植民地支配が次第に拡大する一九世紀まで続いたということである。彼は主に経済的側面を中心に論じ、商品作物の生産やその貿易を活発に進

めたのは華人と東南アジア人であることを強調した。これによってリードは、東南アジアが一九世紀も、ウェスタン・インパクトではなく、アジア商人の活動が代表する現地社会や国家の自律性によって、発展していたことを主張していると言える (Reid 1997a; 1997b)。

もつとも、この「最後の抵抗」という概念の名称が示唆するものは、そのような経済的・文化的発展を示した近世国家も、強大な西洋国家の進出にあつて最後の抵抗を余儀なくされ、ついに征服されるということである。リードはこの時代の終わりを明確に論じてはいないが、彼の序文を読む限り、「最後の抵抗」は、ヨーロッパ諸国による現地国家の武力制圧または植民地国家の支配がピークに達することによって終わりを告げると彼が考えていることはほぼ明らかである (Reid 1997b)。

しかしリードの議論は大きな疑問を残している。彼は「最後の抵抗」——または「近世最後の繁栄」——が一八世紀後半から一九世紀に見られたことを主張しているが、その繁栄期の終わりを明確に示唆しているのは、政治的側面においてのみである。したがって彼が強調する一八世紀まで続く経済繁栄が、植民地期にどう終焉を迎えるのか、あるいは新たに出現した植民地経済とどのような関係を構築するのは明らかにされていない。この点を、次のセクションでさらに詳しく論じたい。

2 華人の世紀と一九世紀後半の 東南アジア貿易

リードは「最後の抵抗」の時代のうち、とくに東南アジアでアジア人のイニシアティブによって貿易が発展した一七五〇〜一八五〇年頃を、「華人の世紀」と名付けた。リードも、また彼とともにこの概念を相次いで用い始めたレオナルド・ブリュッセも、華人移民労働者による輸出産品生産と華人商人によるジャンク貿易の活発化が、この時代の経済発展の要因であったと論じた*₂ (Reid 1997b; Blussé 1999)。

中国は一八世紀に人口が急増したことから食糧の輸入が緊急の課題となり、それまでの海禁政策が緩和されてジャンク船による外洋貿易が認められるようになった。これによってまずアユタヤ（後にバンコック）やサイゴンなど、豊かな米作地帯を近隣に有する地域から、中国へ米が運ばれて来るようになった。さらに揚子江中下流域などの経済先進地域で消費社会が発達するにつれ、東南アジアのエキゾチックな熱帯産品に対する需要が拡大した。そのような産品のうち錫、胡椒、ガンビルなどは、東南アジア各地に移民した華人労働者によって採掘・生産が大規模に行われて中国における需要を満たすようになった。同様に中国で需要の高い海産物（ナマコ、フカヒレ、真珠など）や森林

産物（籐、樟脳など）、燕の巣などは、現地商人によって東南アジア各地の港に集められたものが、華人商人によって中国南岸に運ばれた。本稿ではこのような貿易を、中国市場志向型貿易という語で表すこととする。これはつまり、近代産業とほとんど関わりがなく、華人だけでなく東南アジア人によっても栽培・採集され、最終的に中国で消費された多様な熱帯産品の貿易のことである。この用語を使って筆者は、華人だけでなく東南アジアの人々によっても、東南アジアにおける貿易の発展と経済の再編成が行われたことを示そうとしている（太田二〇一三b）。

華人の世紀の始まりについては、リードもブリュッセも一七世紀末から一八世紀半ばにかけて清朝の海禁政策が緩和されたことを契機と考えているが、その終わりについてはあまり明確な見解が示されていない。リードはこの時代の終わりについてあまり論じておらず、ブリュッセは一八一九年のシンガポール設立以降、華人貿易は欧米帝国主義と相互作用を始めたと述べる。ブリュッセのこの説は興味深い、華人貿易と欧米帝国主義が実際のどのように相互作用したのか、その結果どのような貿易構造が現れたのかは明らかに構想した中国市場志向型貿易構造が、シンガポール設立以降欧米帝国主義とどのような関係を有したのかは、まさに東南アジアにおけるウェスタン・インパクトを

考察する重要なテーマと言えよう。しかしこの点についてはいまだ研究者に見解の一致が見られない。

おそらく、このように「華人の世紀」の終わりに関して見解が一致しないことと関連して、一九世紀後半の東南アジア貿易の性質と構造についても、研究者の意見は大きく隔たっている。近年は多くの研究者が、中国市場志向型貿易がその時代にも活発であったことを主張している（Tagliacozzo 2004； Tagliacozzo and Chang 2011）。他方、別の研究者たちは、植民地期に入ると貿易構造が根本的に変容し、その中で中国市場志向型貿易は量的に非常に小さくなったと考える。これらの研究者はイギリスによるシンガポール設立（一八一九年）と蘭領ジャワにおける強制栽培制度の開始（一八三〇年）が、欧米市場向け産品の貿易を急拡大させたことを重視している（Elson 1999 [1992]: 133）。たとえばJ・トーマス・リンドブラッドは、スマトラ、カリマンタンなどの島々からの天然産品の輸出は、一九世紀には「マナーな」ものでしかなかったと述べた（Tindblad 2002: 101）。つまり、まだ東南アジア史、とくに経済史においてはウェスタン・インパクトの捉え方に関して大きな意見の相違が存在している。一部の研究者たちはシンガポール設立やジャワの強制栽培制度の開始というウェスタン・インパクトによって東南アジアの貿易構造は大きく変容したと考える。これはグローバル・ヒストリーの研究者の見解に近

いとも言えよう。それに對し別のグループの研究者たちは、華人の世紀に行われていた華人と東南アジア人による自律的貿易が一九世紀まで継続したと考えている。しかしこれらの議論の問題点は、どちらのグループもほとんど十分な統計資料を提示していないことである。ウエスタン・インパクトを強調する研究者たちが用いる欧米向け産品——植民地産品——に関する統計は、中国市場志向型貿易で扱われる海産物や森林産物の情報を含むことはほとんどない。一九世紀にも自律的貿易が継続したことを主張する研究者たちは、各地の地域社会における記述的資料を多く利用するが、そのような資料は中国または東南アジア向け産品——非植民地産品——の輸出に関する数量的情報をあまり含まない。こうして見解を異にする二つのグループは、それぞれ性質の違う資料に依拠して互いに噛み合わない議論を続けているのが現状である。

IV 外島オランダ港の貿易

1 貿易統計

このような意見の相違を乗り越えるために、本稿では一八四六―六九年の外島オランダ港における貿易資料に基づ

く考察を試みたい。^{*3}この資料が有意義なのは、植民地産品と非植民地産品に関する情報をともに含む点にある。外島オランダ港とは、後に蘭領東インドの外島と呼ばれるようになる地域（スマトラ、カリマンタン、スラウェシ、小スンダ列島、マルク諸島、西バプアとその周辺の島嶼）において、オランダ植民地当局が関税を課し、貿易を管理・記録した港を指すものとする（図1）。外島とは一般に、東インド諸島のうちジャワとマドゥラ以外でオランダ支配が及んだ地域とされるが、それは一九世紀を通じて形成・拡大途上にあつた。それに従つて外島オランダ港は当該期間にも増加していたが、それでも図1から明らかのように、この時期はまだアチェをはじめとする北スマトラ、バリ、ロンボックの活発な独立貿易港を含まない。したがつて本稿で用いる統計の数値が急増していることは、実際には貿易の増加だけでなく、オランダ支配が拡大し、貿易の中で植民地当局が捕捉できる部分が増えたことも意味している。しかし本統計は、港ごとに税関を通過する輸出品および輸入品を原則としてすべて網羅していることから、輸出入品目や輸出入先の内訳を知ることができるという点で極めて貴重な資料といえる。これによつて本資料から、植民地産品と非植民地産品——減多に統計に含まれない中国向け海産物、森林産物を含む——から成る貿易全体の構造を知ることが可能となる。



図1 19世紀半ばの島嶼部東南アジアの主要港と外島オランダ港

2 輸出

表1は、外島オランダ港からの全輸出入額を品目によって分類したものである。ここでは輸出品をまず輸出先によって欧米向けと中国・東南アジア向け産品とに大別し、さらに後者を生産者によって、華人産品と現地産品に分けている。欧米向け産品は西スマトラにおけるコーヒーのよう、原則として植民地政府もしくは欧米（主にオランダ）企業の資本投入を受けて大規模に生産された。華人産品は、リアウ・ビントアン島における胡椒農園やバンカ島の錫鉱山などのように、華人移民労働者によって生産された。現地産品とは、資本投下や大規模な労働投入を伴うことなく、現地の人々によって採集されたさまざまな産品を指す。大半は海産物もしくは森林産物で、大部分が中国へ、一部が東南アジアの他地域へ輸出された。

このように分類すると、ウェスタン・インパクトが外島オランダ港周辺地域における生産と輸出に大きな影響を与えたケースは比較的少ないことが確かめられる。コーヒー栽培は、最大の産地である西スマトラではオランダ植民地政府の主導で進められたが（Dobbin 1983: 235-236）、第二の輸出地であるマカッサルでは、トラジャ地方の高地で現地の人々が自発的に栽培を始めたものが、一八五〇年代以

表1 外島オランダ港からの輸出品 (1846~69年)

カテゴリー	輸出品目	1846		1850		1859		1869	
(1) 欧米向け産品	コーヒー	1,207,903	19.5%	2,524,348	31.7%	5,378,650	41.7%	8,820,295	37.9%
	カカオ	45,940	0.7%	48,060	0.6%	148,328	1.1%	200,823	0.9%
	煙草	158,574	2.6%	179,452	2.3%	113,164	0.9%	201,389	0.9%
	錫 (ブリトウン産)							1,912,148	8.2%
	ガンビル (リアウ産)	346,035	5.6%	370,303	4.7%	792,031	6.1%	1,796,110	7.7%
	小計	1,758,452	28.4%	3,122,163	39.2%	6,432,173	49.9%	12,930,765	55.5%
(2a) 中国・東南アジア向け華人産品	胡椒	221,529	3.6%	261,932	3.3%	564,294	4.4%	731,553	3.1%
	ガンビル (リアウ産を除く)	83,852	1.4%	58,179	0.7%	113,465	0.9%	107,287	0.5%
	金	830,368	13.4%	608,857	7.6%	181,182	1.4%	54,707	0.2%
	錫(ブリトウン産を除く)	28,089	0.5%	21,895	0.3%	200	0.0%	3	0.0%
	小計	1,163,838	18.8%	950,863	11.9%	859,141	6.7%	893,550	3.8%
(2b) 中国・東南アジア向け現地産品	海産物	215,750	3.5%	733,728	9.2%	727,823	5.6%	922,396	4.0%
	森林産物	1,270,813	20.6%	831,626	10.4%	2,084,006	16.2%	3,627,024	15.6%
	その他	1,772,426	28.7%	2,320,539	29.2%	2,797,010	21.7%	4,929,177	21.2%
	小計	3,258,989	52.7%	3,885,893	48.8%	5,608,839	43.5%	9,478,597	40.7%
計		6,181,279	100.0%	7,958,919	100.0%	12,900,153	100.0%	23,302,912	100.0%

(出所) Batavia Departement van Financien 1851-1870

(注) 単位: オランダギルダー

降ブギス人によって港に運ばれるようになった(山下一九八八・五四一五五)。したがってコーヒーは表1では西洋向け産品に分類されるものの、必ずしもすべての地域で強いウエスタン・インパクトによって生産が開始された訳ではない。ガンビルはもともと中国南部と東南アジアでビロンウ(betel quid)の原料として消費されていたが、一八三〇年代からリアウ産のものは主としてヨーロッパ向けに染色と革なめしの原料として輸出されるようになった(Elson 1999 [1992]: 135; Turnbull 2009: 63)。しかし一八三〇年代以降もガンビルは華人が出資して華人労働者によって生産されており、ウエスタン・インパクトを受けてまったく新たに生産されるようになった産品ではない。錫も初めは中国と東南アジアを輸出先としていたが、ブリトウン産のものは一八六〇年にオランダ資本のブリトン・カンパニーが採掘を開始して以降欧米向け輸出が拡大した(Lindblad 2002: 95)。

したがって表1によれば欧米向け植民地産品が一八四六年では全輸出の三割弱から一八六九年には半分強まで増えているが、マカッサルの輸出するコーヒーやリアウ産ガンビルの輸出増はウエスタン・インパクトによってのみもたらされたわけではないことを認識する必要がある。一方、華人や東南アジア人が生産・採集した非植民地産品は、一八四六年は全輸出の三分の二以上を占め、一八六九年でも

半分近くに及んだ(表1)。コーヒーや錫といった植民地産品の生産が急増したため非植民地産品の占める比率は下がってはいるものの、その輸出が急速に重要性を失ったとは言えない。

外島オランダ港からの輸出を、ほとんど植民地産品を輸出していたジャワと比べると、一八六九年時点で前者が二三〇〇万ギルダー余りであったのに対し、後者は一億一千万ギルダー余りと、前者の五倍近い額の産品を輸出していたように見える。しかしここでも統計のトリックに留意する必要がある。外島オランダ港の統計——輸元元の港における記録——から得られる輸出額は、多くの船が当局の管理をすり抜けたため小さく示される傾向がある。一方ジャワの港で作られた統計では、外島各地からの輸入額が、オランダ外島港で記録されたジャワ向け輸出の二〜三倍の数値で記録されている(太田二〇一三b)。おそらくバタヴィアやスマランといったジャワの港は大消費地に近くさまざまなメリットがあつたため貿易商人は関税を支払つてもこれらの港を利用したが、外島オランダ港にはそうしたメリットがなかつたため寄港しなかつたのである。こうしたことを考慮に入れると、非植民地産品が多くを占める外島オランダ港の輸出は、ジャワからの輸出と比べて極端に小さいとは言えない。

3 輸人品

一方、輸人品においては、ウェスタン・インパクトは明らかであった。ヨーロッパ産品の輸入は一八世紀までは東南アジアでは無視し得るほどの量でしかなかったが、図2が示すように、一九世紀半ばには最重要輸人品となった。

これは外島オランダ港のすべての港で起きていた現象である。小林篤史によれば、シンガポールから東南アジア各地に輸出された最大のヨーロッパ産品はイギリスの綿製品で、それは一八四〇年代に蘭英植民地当局の間で関税政策が合意に達したのをきっかけに拡大した(小林二〇一二)。それ以外の輸人品では、インド綿製品の比率が下がり続け、代わつてインドアヘンがより重要になったことが確かめられる。これは、イギリスがベンガルにおいてアヘンの生産を独占・促進した結果である。家庭用品というカテゴリーは、磁器、鉄製品、煙草といったあらゆる種類の日用品から構成され、大半が中国から輸入された。

このように、連続性が顕著であつた輸出品目と異なり、輸人品においては新たな要素が明らかである。一八世紀末までは中国製の日用品に加えてインドや東南アジア各地で生産された染織品が東南アジアの重要な輸人品であつたが

(Milburn 1999 [1813]: II, 388-433)、一九世紀半ばになる

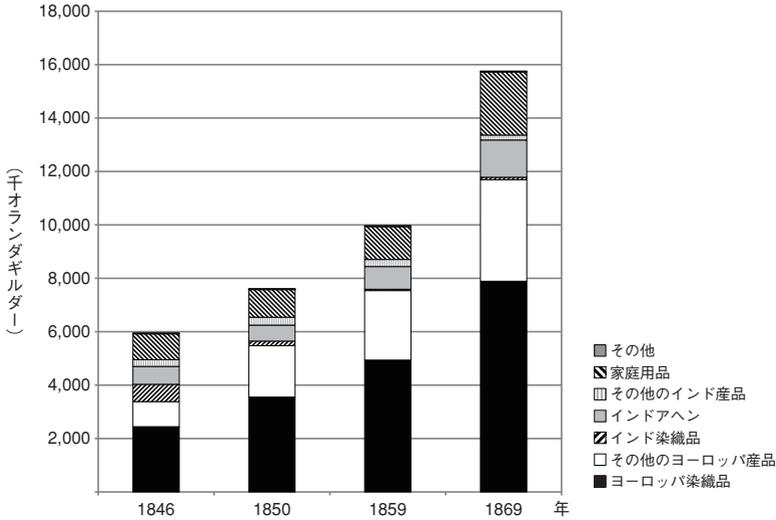


図2 外島オランダ港への輸入品 (1846~69年)

(出所) Batavia Departement van Financien, 1851-1870

と東南アジアの人々はより多くの安価なイギリス綿製品を消費するようになった。これらは、イギリス本国の工業力増大と、シンガポールの台頭に代表されるイギリス植民地経済の影響力の浸透という、ウエスタン・インパクトがもたらした変化と言えよう。

4 貿易商人

他方、貿易を担う商人という点では華人の世紀からの連続性が顕著であったが、一方でいくつかの近代的要素も重要であった。ブギス人は以前の時代に引き続いて、初期のシンガポールにおけるインドネシア諸島との貿易において、最も重要な役割を果たした。そのネットワークはシンガポールの発展に伴い、カリマンタン全域、スンバワ、バリ、ロンボック、フロレス、ティモール、そしてニューギニアへとかつてない広範囲に広がった (T'agliacozzo 2004: 31)。

一八三〇年代以降は、シンガポールに拠点を置く華人商人がこの貿易に参加した。なかでも西洋式帆船を入手した商人は、インドネシア諸島各地とシンガポールを結ぶ貿易の最も重要なプレーヤーとなった (Wong 1960: 74-84; Reid 1993b: 28-29)。つまり、シンガポールの新興商人が、最新とは言えないまでも新しい欧米の技術を入手して、こ

の海域の貿易のイニシアティブを取るようになったのである。しかしブギス人も、とくにスラバヤと島嶼部東部の間の海運では、伝統的帆船であるピニシを操って重要な役割を果たした。

これらの華人およびブギス商人は、中国・東南アジア向けの産品をシンガポールやジャワへ運び、引き替えにさまざまな輸入品、とくにイギリス綿製品をインドネシア諸島のさまざまな地域に運んだ（小林二〇一七）。オランダ植民地政府は、一八二四年以降に設立されたオランダの海運会社を積極的に支援したが、一九世紀半ばまでは、インドネシア諸島の海運ではブギス人やその他のアジア人が支配的であり、彼らは後の時代にもオランダ海運会社と競争し続けた。

5 インドネシア諸島における

ウエスタン・インパクト

このようにインドネシア諸島では、ウエスタン・インパクトの影響は地域や分野によって濃淡を持ちながら及んでいた。一八七〇年頃までにジャワでは大半の輸出をコーヒーや砂糖などの植民地産品が占めるようになっていたが、ジャワを除く地域では、輸出の約半分は中国または東南アジア向けの非輸出産品であり、その量もジャワの植民

地産品輸出と比べて甚だしく見劣りするものではなかった。輸入品の多くは中国やインドの産品からヨーロッパ産品に置き換わったが、それを各地の港に運ぶ担い手は以前から引き続き華人またはブギス人が主体であった。シンガポールがイギリス綿布という強力な商品と、さらに近代的な港湾設備や法的・金融的システムを商人に提供するようになると、華人やブギス人はその機会を利用してネットワークを広げ、インドネシア諸島全体における貿易を発展させた。このようにしてヨーロッパ諸国のもたらした近代的（または帝国主義的）貿易は、既存の中国市場志向型貿易構造と結びついたのであった。

おわりに

本稿の前半では、グローバル・ヒストリー研究のさまざまなアプローチを紹介し、東南アジア史研究をその中に位置づける上での課題を指摘した。「比較」のアプローチにおける世界経済の検討において重要なのは、その構造的理解である。中心がどの地域にあったか、ある地域が他よりも優位であったかどうかを追究するのではなく、さまざまな地域がどのように構造的に結びついて世界経済を構成していたかを探究する必要がある。「平行」のアプローチで

は、リーバーマンが試みたように国家の発展のリズムを検討するだけでなく、民間の人々の活動も考察対象に含めた歴史の検討が行われるべきであろう。ある同じ起因的要素が異なる地域でどのように発展し、その地にどのような影響を及ぼしたかを検討する「平行」のアプローチは、環境要因や農業技術などを考察対象に含める際にも有効と考えられる。「接続」のアプローチでは、ウエスタン・インドの捉え方が多くの研究において課題として残っていることを示した。近年の日本史や東南アジア史の研究者はウエスタン・インドの再考を顕著に進めているが、東南アジア史においては近世から近代（植民地期）への移行におけるウエスタン・インドの重要性に関してまだ見解の一致は得られていない。

本稿の後半では、一九世紀半ばにおける外島オランダ港の貿易を取り上げて、ウエスタン・インドがインドネシア諸島に一樣に圧倒的な影響を及ぼした訳ではないことを示した。もともとジャワにおいては一八七〇年までに生産様式も地域社会の構造も強制栽培制度によって大きく変容させられており、それ以降の時代になると、スマトラ東海岸などにおいてもプランテーション経済の浸透によって強いウエスタン・インドが確かめられるようになる。しかしそれでも地図上で見れば、ウエスタン・インドが人々の生活のあり方まで徹底的に変容させた地域は、地

理的に限定されている。

我々は植民地勢力の浸透が弱かった地域の情報を、一九世紀にはまだ十分に持ち合わせない。しかしその浸透が弱かったことはウエスタン・インドが皆無であったことを意味しないことを、先にあげたインドネシア諸島の例は示した。同様に地域住民がウエスタン・インドの要素を部分的に、自発的に選択しながら取り入れた例は、東南アジアの他の地域にも多く起きていたと考えるのが妥当であろう。また、植民地経済体制が確立した後も中国や東南アジア向けの産品生産・輸出が活発であったことは、本稿で検討した外島だけでなく、ジャワでも同様であったことが確認されている。このようにしてウエスタン・インドを相対化することは、東南アジアの既存のネットワークや生活様式の強靱さや柔軟さを再確認する作業ともなる。この作業はまた、東南アジアの経済発展経路における独自性を追究することともなる。

地域的に異なるウエスタン・インドの影響を検討する上で、リーバーマンの提唱した「平行」のアプローチは（たとえ検討の結果が「平行でない」ことを示すことになろうとも）有効であるように思われる。そして東南アジアは資料の存在だけでなく、その広範な研究蓄積からも、そうした検討を行う上で有利性を持った地域であるように思われる。というのは、経済史研究に有効な数値的情報は都市

部に集中するとはいえ、民族誌的・記述的な情報は、名目のみ植民地化された広い領域の相当部分から得ることができ、さるからである。ウエスタン・インパクトの浸透の度合いを決定する要素には、植民地政府の意思だけではなく、現地社会の環境や生産様式、さらに政治的中心との交通条件なども重要であった。このような面の検討において、東南アジア史研究、とくに自然科学や社会科学諸分野と密接な関係のもとに進められてきた日本の東南アジア史研究は、ウエスタン・インパクトの再考に有利な条件を持っている。そのような作業は、ウエスタン・インパクトの把握の仕方にまだ困難を抱えるグローバル・ヒストリー研究に対する、東南アジア研究からの貢献となるのではないだろうか。

●注

*1 川勝と浜下は彼らの著作の考察範囲を一五〇〇年から一九〇〇年としており、しかもその著作の執筆者の一人に杉原も含まれている（浜下・川勝一九九二）。したがって少なくともこの著作においては川勝、浜下、杉原は同じ貿易圏を扱っていると言ってもいいのだが、本文で述べたように、杉原の議論は全二者とは議論における力点が異なる。

*2 プリュッセが筆者に個人的に伝えたところによると、「華人の世紀」という概念を初めて用いたのは、実は日本の桜井由躬雄であったという。桜井自身がリードやプリュッセ以前

にこの概念を論考の中で用いた例は見当たらないが、桜井が以前から一八世紀の東南アジア経済における華人の重要性を指摘していたことを考えると、プリュッセの言う通りであった可能性は非常に高い（プリュッセは日本語が堪能で、桜井とも個人的な付き合いがあった）。本稿の基になったのは、本特集の序文で示されているように二〇一二年一月の東南アジア学会研究大会の一セッションであったが、その時に桜井から得た質問やコメントは、本稿の執筆に大いに役立った。そのわずかな週間後の桜井の急逝はたいへん惜しまれる。

*3 詳細は別稿を参照されたい（太田二〇一三b）。

*4 植村泰夫によるジャワ煙草生産の研究（植村二〇〇八）、および島田竜登によるジャワ沿岸貿易の検討（Shimada 2013）などを参照されたい。

●参考文献

アブリルゴド、ジャネット・L（二〇〇一）『ヨーロッパ覇権以前——もう一つの世界システム』佐藤次高・高山博・斯波義信・三浦徹訳、岩波書店（Abu-Lughod, Janet L. [1989] *Before European Hegemony: The World System A.D. 1250-1350*. Oxford: Oxford University Press）。

ウォーラステイン、I（一九八一—一九九七）『近代世界システム』川北稔訳、一・二巻、岩波現代選書、三・四巻、名古屋大学出版会（Wallerstein, I. [1974-1989] *The Modern World System*. 3 vols. New York: Academic Press）。

白井隆一郎（一九九二）『コビーが廻り世界史が廻る——近代市民社会の黒い血液』中公新書。

植村泰夫(二〇〇八)『植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究』

文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。

太田淳(二〇〇三)「オランダとインドネシアにおける歴史認識をめぐる軋轢と対話——二〇〇二年、オランダ東インド会社四〇〇周年記念行事とその反響」『アジア太平洋討究』五、

八一—九六頁。

太田淳(二〇一三a)「オランダ東インド会社からみた近世海域アジアの貿易と日本」ニッポンコム編『東アジアの中の日本の歴史——中世・近世』(<http://www.nippon.com/ja/features/00105/>) (二〇一三年一月二十六日)。

太田淳(二〇一三b)「ナマコとイギリス綿布——一九世紀半ばにおける外島オランダ港の貿易」秋田茂編『長期の一八世紀』から「東アジアの経済的再興」へ——アジアからのグローバルヒストリー』ミネルヴァ書房、八五—一二七頁。

川北稔(一九九六)『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書。

グッドマン、J(一九九六)『タバコの世界史』和田光弘・森脇由美子・久田由佳子訳、平凡社。

小林篤史(二〇一二)「一九世紀前半における東南アジア域内交易の成長——シンガポール・仲介商人の役割」『社会経済史学』七八(三)、八九—一二頁。

杉原薫(一九九六)『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房。

ダイヤモンド、ジャレド(二〇一二)『二〇〇〇』『銃・病原菌・鉄』上・下巻。倉骨彰訳。草思社文庫(Diamond, Jared [1997] *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*. New York: W. W. Norton)。

武田尚子(二〇一〇)『チョコレートの世界史』中公新書。

角山栄(一九八〇)『茶の世界史——緑茶の文化と紅茶の社会』中公新書。

ドルビー、アンドリュー(二〇〇四)『スパイスの人類史』樋口幸子訳、原書房(Dalby, Andrew [2002] *Dangerous Tastes*. Berkeley: University of California Press)。

浜下武志・川勝平太編(一九九一)『アジア交易圏と日本工業化』一五〇〇—一九〇〇リプロボート。

フランク、アンドレ・グンター(二〇〇〇)『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店(Frank, Andre Gunder [1998] *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*. Berkeley: University of California Press)。

ミンツ、シドニー・W(一九八八)『甘さと権力——砂糖が語る近代史』川北稔・和田光弘訳、平凡社(Mintz, Sidney W. [1985] *Sweetness and Power: The Place of Sugar in Modern History*. Harmondsworth: Viking Penguin)。

山下晋司(一九八八)『儀礼の政治学——インドネシア・トラジャの動態的民族誌』弘文堂。

吉本忍(一九九六)『ジャワ更紗』平凡社。

Andaya, Barbara Watson (1989) *The Cloth Trade in Jambi and Palembang Society during the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. *Indonesia* 48: 27-46.

Batavia Departement van Financien (1851-1870) *Overzicht van den handel en de scheepvaart in de Nederlandsche bezittingen in Oost Indië, buiten Java en Madura, over de jaren ...* Batavia: Landsdrukkerij.

- Bayly, C. A. (2004) *The Birth of the Modern World: 1780-1914*. Blackwell Publishing.
- Blussé, Leonard (1999) The Chinese Century: The Eighteenth Century in the China Sea Region. *Archipel* 58: 107-129.
- Dobbin, Christine (1983) *Islamic Revivalism in a Changing Peasant Economy: Central Sumatra 1784-1847*. London: Curzon Press.
- Elson, Robert E. (1999 [1992]) International Commerce, the State and Society: Economic and Social Change. in Nicholas Tarling (ed.), *The Cambridge History of Southeast Asia*, Volume 2, Part I: *From c.1800 to the 1930s*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 127-191.
- Flynn, Dennis O. et al. (2003) *Global Connections and Monetary History, 1470-1800*. Aldershot, Ashgate.
- Hoang Anh Tuan (2007) *Silk for Silver: Dutch-Vietnamese Relations, 1637-1700*. Leiden and Boston: Brill.
- Lieberman, Victor (2009) *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830*, Volume 2: *Mainland Mirrors: Europe, Japan, China, South Asia, and the Islands*. Cambridge etc.: Cambridge University Press.
- Lindblad, J. Thomas (2002) The Outer Island in the 19th century: contest for the periphery. in Howard Dick, Vincent J. H. Houben, J. Thomas, and T hee Kian Wie, *The Emergence of A National Economy: An Economic History of Indonesia, 1800-2000*. St Leonards: Allen & Unwin: Leiden: KITLV Press, pp. 82-110.
- Milburn, William (1999 [1813]) *Oriental commerce, containing a geographical description of the principal places in the East Indies, China and Japan, with their produce, manufactures and trade, including the coasting or country trade from port to port [...]*. New Delhi: Munshiram Manoharlal.
- Pomeranz, Kenneth (2000) *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*. Princeton: Princeton University Press.
- Reid, Anthony (1988-1993) *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, 2 volumes. New Heaven and London: Yale University Press.
- Reid, Anthony (1993b) The Unthreatening Alternative: Chinese Shipping in Southeast Asia 1675-1842. *Review of Indonesian and Malaysian Affairs* 27: 13-32.
- Reid, Anthony (1997a) Introduction. in Anthony Reid (ed.), *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. Basingstoke and London: Macmillan Press, pp. 1-25.
- Reid, Anthony (1997b) A New Phase of Commercial Expansion in Southeast Asia, 1760-1850. in Anthony Reid (ed.), *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. Basingstoke and London: Macmillan Press, pp. 57-81.
- Riello, Giorgio and Prasanna Parthasarathi (eds.) (2011) *The Spinning World: A Global History of Cotton Textiles, 1200-*

1850. Oxford University Press.

Shimada Ryuto (2013) The Long-term Pattern of Maritime Trade in Java from the Late Eighteenth Century to the Mid-nineteenth Century. *Southeast Asian Studies* 2-3: 475-497.

Tagliacozzo, Eric (2004) A necklace of fms: marine goods trading in maritime Southeast Asia, 1780-1860. *International Journal of Asian Studies* 1-1: 23-48.

Tagliacozzo, Eric and Wen-chin Chang (2011) *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*. Durham: Duke University Press.

Trocki, Carl A. (1999) *Opium, Empire and the Global Political Economy: A study of the Asian opium trade 1750-1950*. London and New York: Routledge.

Turnbull, C. M. (2009) *A History of Modern Singapore 1819-*

2005. Singapore: NUS Press.

Wong Lin Ken (1960) The Trade of Singapore, 1819-1869. *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 30-4: 1-315.

●著者紹介●

①氏名……太田淳(おおた・あつし)。

②所属・職名……広島大学大学院文学研究科・准教授。

③生年・出身地……一九七一年、福岡県。

④専門分野・地域……海域東南アジアの移民、貿易、輸産品の生産と収集・西ジャワ、西カリマンタン。

⑤学歴……早稲田大学大学院文学研究科修士課程(美術史専攻)、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史専攻)、オランダ・ライデン大学博士号取得(歴史学)。

⑥職歴……国立シンガポール大学人文社会科学部ポスドク研究員(三五歳、二年間)、台湾・中央研究院亚太区域研究專題中心助研究員(三七歳、四年間)、四一歳より現職。

⑦現地滞在経緯……インドネシア(三〇歳、一年間、オランダの博士課程の一年間)、その他一〜三週間の短期調査多数。

⑧研究方法……オランダ、インドネシア、イギリスの図書館での資料調査を主としつつ、現地での聞き取り調査も行う。

⑨所属学会……東南アジア学会。

⑩研究上の画期……一九九一年にタイを旅行したこと、一九九三年に東京の博物館でアルバイトをしたこと。前者では山間部を歩き回り、地域社会の庶民の生活に関心を持つようになった。後者ではその博物館がランブン発見のインド更紗を購入したことから、ランブンを支配した西ジャワ・バンテン王国の歴史に関心を持つようになった。

⑪推薦図書……Warren, James Francis (1981) *The Sulu Zone, 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press. 海賊を経済活動の一環として再検討し、さらに海洋民の生活やその経済的役割も描いた良書。